



名古屋大学電子図書館国際会議に参加して

井上 敏宏

かなり大型の台風 11 号が接近しつつある 8 月 25 日、名古屋大学野依記念学術交流館にて名古屋大学電子図書館国際会議は開催されました。翌 26 日を含む二日間で基調講演 2 本、事例報告などが 14 本、計 16 本の講演を拝聴しました。

私は元来、個人的な旅行は好きなのですが、仕事絡みの出張は面倒なので嫌いです。しかし、現在担当している業務の内容が内容だけにさすがに今回の会議には出席しなければなるまいと観念し、自ら希望して少ない出張旅費を削ってもらい、参加させていただきました。

私の現在の正式な所属、職名は奈良先端科学技術大学院大学研究協力部学術情報課専門職員、著作権・DB 構築担当となっています。ちょっと何をしているのか、よくわからない肩書きですよ。図書館資料の電子化担当で、電子化つまり著作物の複製を作るにあたり、著作権処理の事務手続きをし、電子図書館データベースに登録をする担当の職員というわけです。

あらかじめ、言い訳しておきますが、私が奈良先端科学技術大学院大学に出向してきたのは約 1 年半前、昨年 4 月です。しかも昨年度、最初の一年間の担当は運用係でした。運用係は普通に関覧、ILL、資料受入、目録などをする係ですので、電子化の部署は今年の 4 月からです。半年です。ですから、電子図書館に詳しいわけでもないですし、著作権に詳しいわけでもないです。曼陀羅ネットワークとも、2 年前にはまったく関係がなかったのです。そんな訳で電子図書館の国際会議に行ってきたからと言って、何か気の利いた感想を期待されても、ご期待にはそえません。あくまで、そんな私の感想なので、あしからずご了承ください。

(次頁へ)

【目次】

名古屋大学電子図書館国際会議に参加して	...	1
第 36 回全国大会(広島)報告	...	3

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL : <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

ところで、今回の国際会議の参加者ですが、当日配布の名簿を見ますと 170 名になっています。講演（発表）者を含んでいるのと、うち 63 名の方が名古屋大学にご所属の方なので、少し水増しぎみの傾向はあるものの、100 名近くは全国から集まってきているのですから、なかなか盛況だったと言って良いのではないのでしょうか。企業からの参加者も若干いらっしゃいました。

講演は、筑波大学の杉本重雄教授によるメタデータに関する講演からはじまり、Web マイニング、国立国会図書館の中期計画について、デジタルレファレンスサービスについての調査結果報告等があり、タイ Asian Institute of Technology の Vilas WUWONGSE 氏からはタイ政府主導による図書館機能を含む生涯学習施設 (Thai Knowledge Park) 設置取り組みの報告などがありました。

中でも私が、特に興味深く聞いたのは、以下の 3 つの講演でした。

1 つは、名古屋大学附属図書館研究開発室の逸村裕助教授からの「Academic Knowledge Factory (学術ナレッジファクトリー)」についての報告です。「今までの図書館主導の電子図書館機能は、大学内からみていると、あまり教育研究機能のサポートにはなっていなかった。もっと学内の研究成果を反映させ、発信できる機能を持つべき。」ということで、取り組まれたプロジェクトだそうです。学内で生産される紀要などの電子的公開、雑誌投稿論文の投稿原稿を大学でアーカイブするなどといったことなのですが、これを附属図書館と情報連携基盤センターが附属図書館研究開発室を介して、共同で取り組んだという点がおおいに気がなりました。

本学にも情報科学センターがあり、附属図書館研究開発室があります。附属図書館の実務を担う学術情報課と情報科学研究科の教員で構成される研究開発室は共同で年に一度、「電子図書館学講座」なるものを開催しています。「電子図書館レポート」という冊子も発行しています。過去から継続的に実施している年中行事（電子図書館学講座は平成 11 年度から。今年度は第 7 回目。レポートは平成 9 から 16 年度まで平成 10、13 年度をのぞいて 6 冊。今年度 7 冊目。）なので、とりあえず行っていますが、すでに形骸化しつつある気がしています。大学上層部の思惑、法人化したことでの組織的な事情など、問題はいろいろ考えられるのですが、もう本学では附属図書館と研究開発室が連携して何か目新しいものが出てくるとは思えません。附属図書館と情報科学センターが共同で何かに取り組むことなど、まずあり得ないことのように思えます。

名古屋大でも、実情はいろいろあるのかもしれませんが、もし良好な関係でプロジェクトにあたれたのだとしたら、羨ましいことです。

もう 1 つの興味深い発表は、Elsevier 社の Andrea F. KRAVETZ 氏による「データベースの画面デザイン開発事例について」の発表です。ユーザーの行動を知る事、要望を集めることの重要性についての報告でした。開発チームはユーザーに対し徹底した聞き取り調査を行っており、その結果を開発にどんどん取り入れていきます。今、大学図書館では非常に多くのデータベース、電子ジャーナルなどの商品を契約し提供していますが、使い勝手が悪い場合も多く、そこまで徹底した開発がされているとは思えないものが多い状態です。その中で、今回紹介されたデータベース (Scopus) は確かにデザインの点において、洗練されたものがあるように思いました。

講習会を開いたり、利用マニュアルを作成する職員の立場からも、使いやすいデータベースは歓迎ですし、ユーザーの意見をどんどんくみ上げ、サービスに反映させるという姿勢はサービスに携わるものとして、参考にすべき事例ではないかと思いました。

最後に気になった発表は、タイの Kasetsart University の Asanee KAWTRAKUL 氏からでした。学位論文のメタデータ作成についてであり、一次資料から直接、自動的にメタデータを

抽出するといった取り組みです。本学では、従来から自学修了者の学位論文を電子的に蓄積していて、ここ数年前からは学生自らが論文を PDF 化し、論文書誌情報とともに提出できるシステムを提供しています。

学生自ら書く書誌情報ですからタイトル読み、分ち書きなどに問題があり、データベース化作業で結構やっかいな問題なのですが、まったく違った考えによるこの方法が、どれだけ「使える」のかに興味があったわけです。

実際には、タイ語で書かれた論文を OCR で読み取り、イメージをテキスト化し、エラー検証モジュールを通すという流れで、完全とは言えないまでもかなりの認識率のようで、本学のように著者（学生）自身に書誌まで書かせるという方法をとらないのであれば、作業の大きな助けとなる開発だと思いました。

あと、気になったというよりは耳が痛かったのが千葉大学の土屋附属図書館長。1990年代の日本における電子図書館を歴史的に考察するという話題で、本学の電子図書館については酷評を受けました。それはもう、本当に厳しいご意見で思わず「その頃、私はいませんでした。」と言いたくなるような、それでいて言い逃れのできない、もっともな話だったものだから、思わず客席で笑ってしまっただけです。巨額の資金をつぎ込みながら、蓄積したものを外向きに出してこなかったというのが大きなポイントでしたが、先程の学位論文でも情報科学研究科の論文などはすべて学外にもフリーで公開していますし、電子図書館学講座などの講演なんかも、出来るだけ学外にもフリーになるよう、講演者の先生方にはお願いしています。努力はしているんですけどねえ・・・。

今回、様々な機関、国からの報告を聞く機会に恵まれ、参考になる話、共感できる話にたくさん触れることが出来ました。全体的な方向はいずれも同じようなところを目指していて、普段の自身の仕事を振り返り、今後に活かせることも多かったと思います。台風は結局、名古屋を避けるようにして通過し、一度も傘をさす必要がありませんでした。千葉県あたりで相当な降水量を記録したようでしたが、被害に関してはそれほど大きなものはなかったようで何よりでした。

いのうえ としひろ（奈良先端科学技術大学院大学附属図書館）

第 36 回全国大会（広島）報告

大館 和郎

大図研第 36 回全国大会（広島）は瀬戸内海に面したすばらしい眺望を持つ広島プリンスホテルを会場として、8月27日（土）から29日（月）まで開催され、3日間参加した。

今回の大会の新しい試みは、第1日目に分散会を設けたことだ。これは、ここ数年、全体会の議論が低調であるという指摘を受けて、とられた対応策であろう。全体会の前日に、大会参加者を6つのグループに分け、各グループで議案書・討議資料の事前討議をすることによって、翌日の全体会の議論を活性化させようというつもりだったようだが、私の参加したグループでは、議案書の内容から離れ、参加者の関心のあるトピック（学生の読書促進策、アウトソーシング）を中心にした意見交換になった。翌日の全体会も、分散会での議論の報告といったかたちになって、全体で議論し合うというかたちにはなっていない。今回、岡山支部の解散という報告があったことが残念だった。

分散会の後は広島文教女子大学長の角重始氏の記念講演「平氏政権と厳島神社」があり、厳島神社を支配していた佐伯景弘にスポットを当て、平家全盛の時代から鎌倉幕府成立以後まで、時代の荒波をうまく乗り切っていく豪族について興味深く話していただいた。その後、研究発表が4本（「中国四国地区大学図書館協議会の活動について」土肥善嗣氏（比治山大学図書館）、「大学図書館のボロイング・ポリシーをみる」吉野貴庸氏（同志社大学総合情報センター）、「地域における短大図書館」小糠しのぶ氏（島根女子短期大学附属図書館）、「支部会員アンケートの試みー愛知支部活動報告として」黒柳裕子氏（豊橋技術科学大学附属図書館）・中島慶子氏（豊橋創造大学附属図書館））があり、そのあと懇親会と続いた。

第2日目は全体会の後、昼食を食べながら気軽に意見を交換するラウンドテーブルに参加した。8つのテーマにしたがってそれぞれグループが分けられているが、「館内機器利用」というグループに参加した。普段、あらたまって話すこともないこのようなテーマでたっぷり時間をとることができたのは初めてだった。

その後の課題別分科会は「利用者教育／情報リテラシー教育」に参加した。まず、前田哲治氏（神戸大学附属図書館）の報告「神戸大学附属図書館における主題別ガイダンスの紹介」では、個々のデータベースをガイダンスで紹介していくうちにマイナーなもの残り、参加者が減ってきた結果を反省し、データベースの説明会というスタイルをやめて、主題別の資料の探し方というスタイルでガイダンスを始めたという経緯が面白かった。また、独立した情報リテラシー係があるのがうらやましかった。続いて鈴木正紀氏（文教大学越谷図書館）が「文教大学越谷図書館におけるガイダンス「メニュー化」の試み」を報告された。従来実施してきた文献検索ガイダンスでは、どういったことをするのか具体性に欠けるので、実施内容をより具体化して申込者に提示し、どういった内容を希望するかを選択しやすくするためにガイダンス「メニュー化」を始めたという報告だった。

終了後、現地広島支部の自主企画「お好み焼きツアー」に参加した。戦後、お好み焼きの屋台が集まったのが始まりである「お好み村」は、今では高層ビルに生まれ変わっている。広島風お好み焼きは、生地を練らず、粘りが出ないようにうすく広げていくので、粘りのある大阪のお好み焼きとは違う。東京のもんじゃ焼きに似ているが、トッピングのそばやうどんを加えるのが特徴だ。

第3日目は主題別分科会の「生物・医学系」に参加した。鈴木康綱氏（元自治医科大学）が「自治医科大学図書館のこれからの課題と問題点」と題する報告をされた。その中で外国学術雑誌の高騰問題への対応策として、図書館団体レベルでの交渉力強化と個別館での利用頻度調査などによる購入タイトルの絞り込みが挙げられた。

そのあとオプションツアーとして、第20回日本図書館協会建築賞を受賞した広島修道大学図書館の見学ツアーに参加した。広島市北西の丘陵の傾斜地に抜がったキャンパスを登っていくとガラス張りの外観の建物が現れる。正面玄関を入ったところの開放的なエントランスホールで図書館を建築された当時の課長さんに説明を受けた。他大学図書館の調査など綿密な事前調査と細かいところに配慮がいき届いた設計プランに感心した。閲覧室は天井が高いため、書架の段数が多くても開放感がある。また畳を敷いた和室、屋上庭園、ラウンジなどくつろぎを感じさせるスペースがあちこちに設けられている。

今回の全国大会は会場のスペース、設備も申し分なく、快適な環境の中で3日間を過ごすことができた。また開催地の広島支部の方々のすばらしいチームワークによる大会運営も大変印象に残った。

おおだて かずお（京都学園大学図書館）